

Title	エクリチュールの比喻
Sub Title	La Metaphore de l'écriture
Author	永井, 均(Nagai, Hitoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1977
Jtitle	哲學 No.66 (1977. 9) ,p.27- 54
JaLC DOI	
Abstract	L'intention de la presente etude est double : renvoyer la discussion sur la metaphore a son origine : l'écriture; et ramener les interpretations de l'écriture a son origine : la metaphore. C'est par cette voie que nous aurons la possibilite a la fois d'eclaircir la signification de la metaphore et d'expliquer le concept de l'écriture. C'est la d'ailleurs que sera montree l'invalidite des analyses structurales et phenomenologiques de la metaphore. Nous commencerons par mettre en question la theorie structuraliste de la metaphore : celle de Roman Jakobson. Nous examinerons dans la suit la critique du structuralisme par Paul Ricoeur afin d'elaborer notre conception de decalage. Nous etudierons enfin l'analyse de Max Black pour reconstituer sa theorie d'interaction de la metaphore. Les resultats de ces examens nous permettront de mettre en lumiere la metaphore de l'écriture chez Jacques Derrida. Cet eclarcissement ouvrira sans doute pour la premiere fois la discussion fructueuse sur la metaphore. Parce que la metaphore de l'écriture est fondee sur l'écriture de la metaphore.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000066-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エクリチュールの比喻

永 井 均*

La Métaphore de l'écriture

Hitoshi Nagai

L'intention de la présente étude est double : renvoyer la discussion sur la métaphore à son origine : l'écriture ; et ramener les interprétations de l'écriture à son origine : la métaphore. C'est par cette voie que nous aurons la possibilité à la fois d'éclaircir la signification de la métaphore et d'expliquer le concept de l'écriture. C'est là d'ailleurs que sera montrée l'invalidité des analyses structurales et phénoménologiques de la métaphore.

Nous commencerons par mettre en question la théorie structuraliste de la métaphore : celle de Roman Jakobson. Nous examinerons dans la suite la critique du structuralisme par Paul Ricoeur afin d'élaborer notre conception de décalage. Nous étudierons enfin l'analyse de Max Black pour reconstituer sa théorie d'interaction de la métaphore.

Les résultats de ces examens nous permettront de mettre en lumière la métaphore de l'écriture chez Jacques Derrida. Cet éclaircissement ouvrira sans doute pour la première fois la discussion fructueuse sur la métaphore. Parce que la métaphore de l'écriture est fondée sur l'écriture de la métaphore.

* 慶応義塾大学大学院文学研究科博士課程 (倫理学)

1

それが全てであるとは断定しがたいにしても、哲学者の仕事の中心は、新たな比喩の発見、より正確にはその形成作業 (élaboration) である。最古の哲学者タレスが、万有のアルケーは水であるといったとき、彼はひとつの比喩を語っていたのである。「水」がいかなる比喩機能をはたしていたのか、今のわれわれには想像しがたいにしても、なお、万有のアルケーが「水」でありえたのは、男が「狼」でありうる限りでしかないことは確かであるように思える。(「狼」がいかなる比喩機能をはたすかは誰でも知っていよう。)

現代の哲学者が、例えば心身関係の問題に関して「同一説」を提唱するとき、彼らもまたひとつの比喩を語っているように思われる。彼らはしばしば、意識状態と脳過程の関係を、稲妻と放電現象の、あるいはまた宵の明星と金星の関係に譬えた⁽¹⁾。同一説をめぐる争点はこの比喩が適切であるか否かにあったと解釈することもできる。今、この論点について詳論するつもりはない。問題は、それが何であれこうした哲学的比喩には何か本質的な不適切さがあるようにみえるという点にある。同一時刻を示す二つの時計に譬えようと(並行説)、力と物体の運動の関係に譬えようと(因果説)、心身関係を何かに譬えることを自体に、何かしら無理が感じられるのである。心身関係は、ほかの何かの関係に、事実、似ているだろうか。それが今日に至るまで哲学的問題でありえたのは、その関係が元来比喩を絶し、他のいかなる関係にも、事実、似てはいないからなのではあるまいか。にもかかわらず哲学者は、似てはいないものの中に類似を発見したと思ひ込み、譬えられぬものを譬え、無理を承知で本質的に比喩を絶するはずの空間に、新たな比喩を架設していこうとするかのようである。

本稿の目的は、とはいえ、そうした問題に直接的に答えることではない。哲学者たちが形成してきた様々な限界比喩のうち、近年の傑作とみられ

る、J. デリダによる「エクリチュール」⁽²⁾の比喩について、ささやかな論究を試みようというにすぎない。その論究が還って比喩^{メタフォール}の意味を返照することがあるとすれば、すでに望外の成果というに足りる。問題は垂直方向に設定されねばならぬ。だがそれに先立って、比喩解釈の方法が成立しうる一般的基盤を確定しておく必要がある。まずは、比喩をめぐるごく初歩的な知識のいくつかを、われわれの論点に関与する限りで、検討しなおすことから始めたいと思う。

2

比喩について語る際に、しばしば論及される隠喩と換喩の区別⁽³⁾は、周知のごとく、もとをたどればソシュールの統合（連辞）関係（rapports syntagmatiques）と連合（連想）関係（rapports associatifs）の区別に由来する。ソシュールは次のように語っている。「統合関係は現前している。それは現にある連鎖^{つながり}の中で、同じ様に現前的な二つのまたは多数の項に基いている。逆に、連合関係は、現前していない項を、記憶の潜在的な連鎖^{つながり}の中で、結びつけている。」⁽⁴⁾ 隠喩が連合関係に、換喩が統合関係に由来することはいうまでもない。それにもかかわらず、上の引用文からこの由来を直接読みとることはむずかしい。ソシュールはそこで、記号表示^{シニフィアン}、記号内容^{シニフィエ}の両面を含んだ記号そのものの中にある関係を問題にし、剩え、重点を記号表示面^{シニフィアン}においているの⁽⁵⁾に対して、比喩機能は専ら記号内容面^{シニフィエ}の間にある関係にかかわるはずだからである、ここに既に一つの問題の端緒があることを、まずは確認しておきたい。

ソシュールのこの着想を、しかし、比喩形象の分類に適用すべく拡大解釈したのは、ロマーン・ヤーコブソンであった。ヤーコブソンは、統合関係と連合関係を、例えば、A. マルティネが対^{コントラスト}比と対^{オポジション}立といった指標によって（イェルムスレウ的な意味で）内在的に特徴づけたの⁽⁶⁾に対して、近接と類似という指標によって、超越的に特徴づけた⁽⁷⁾。ヤーコブソンによ

れば、語ることは、ある言語的実在体を選択することと、それらをより複合的な言語的単位へ結合することとを含んでいる。勿論、前者がソーシャルの連合関係、後者が統合関係にあたる。一般に、記号を解釈する二つの手段とみなされているコードとコンテキストも、それぞれ連合、統合関係に割りあてられる。コードから選択される言語的実在体は、範列的に、様々なレベルの類似性につながっているのに対して、複合的な言語単位へ結合されて成ったコンテキストの諸要素は、連辞的に、互いに近接性によってつながっている。ヤーコブソンは、失語症の二つの型を、類似性の異常（すなわち選択力の障害）と近接性の異常（すなわち結合力の障害）とによって説明しようとしたのである。

この過程で、彼は興味深い事実を発見した、前者の型の失語症患者は、例えば、語や文の断片を与えればそれを完成することができるが、自らそうした言語的実在体を選択することができず、また bachelor という語を使用することはできても、それを unmarried man と言い換えることができない。そうした患者はまた隠喩的表現を全く理解することができず、逆に換喩的表現（例えば、ナイフというかわりにフォーク）をしばしば用いた。後者の型の失語症患者は、例えば、単語や断片的表現を選択することはできるが、それらを結合することができず、またコンテキストに依存する表現を理解することができない。そうした患者はまた換喩的表現を理解することができず、隠喩的表現（例えば、顕微鏡のかわりに望遠鏡）をしばしば用いたのである。

類似性と近接性という観点からみる限り、上に例示された一般的症状の記述と、比喩的表現に関する特殊的症状のそれとは、確かに一見、同一事態を記述しているようにみえる。そしてヤーコブソンも、そこにある差異をむしろ目立たせぬように論を進めているかのごとくである。しかし、そこには重大な差異があることに注目しておく必要がある。それは、比喩に関する症状の記述は、記号内容の類似や近接にかかわるものであって、

(記号内容^{シニファイエ}と記号表示^{シニファイアン}の結合体としての) 記号^{シニニエ}そのものにかかわるとは言えない、という点にある。既に触れたように、ソシユールも、連合関係と結合関係という名の下に、類似性と近接性を語りはした。しかしそれは主として記号表示の面であり、殊に近接性に関しては記号表示面のみである。それも当然であろう。ソシユール自身そうしたように、記号表示の形態上の類似性と並んで記号内容の類似性(例・enseignement と apprenticesage)を語ることが、確かに類似に関しては、できる。だが、近接に関しては記号内容の近接性とは何を意味するだろうか。ソシユールは、これについて何も語っていない。それもまた当然である。ソシユールにおいては、記号内容^{シニファイエ}とは概念(但し記号表示^{シニファイアン}と離れることができない)の謂いであつた。そして概念に関して、類似は語れても、近接を語ることはできないはずだからである。(概念の近接とは、すなわち類似である。)

ところが、ヤーコブソンは記号内容の近接性について語っているかのように見える。だが、実はそうではない。彼は、言語体系の網目の外に、すなわち(再びイェルムスレウ的な意味で)超越的な物の世界へと、巧みに話題を移しているのである。そうした基盤の上に立つことによって、彼は隠喩と換喩の二元論を、文学理論から始めて更には他の芸術の分野にまで、無媒介的に、拡張していく。ロマン主義と象徴主義における隠喩の優位性は、既に常識に属する。ヤーコブソンが強調するのは、むしろ、写実主義^{リアリスム}における細部描写のもつ換喩的特性である。更に絵画においては、超現実主義^{シュルレアリスム}の隠喩性に対して、立体主義^{キュビズム}の換喩性が対置される。カメラアングルの自在性に由因するとされる映画の本質的換喩性も、クローズ・アップ⁽⁸⁾の提喩的性格を想起すれば、容易に納得することができよう。ヤーコブソン理論の超越性と、言語学からの逸脱を、ここに読みとることができる⁽⁹⁾と思う。

そして逸脱のこの方向と様式が、いわゆる構造主義者たちの理論構成を規制する一つの範型となつたとみることができる。ヤーコブソンから直接

に影響を受けたレヴィ・ストロースの場合、その現われかたもまた直接的である。彼は換喩と隠喩の対比を各所で適用し、様々な領域から興味深い事例を提出している⁽¹⁰⁾。

構造主義に特有の、内在と超越とのこの種の往復運動は、欲望に換喩的構造を認める際のJ. ラカンのフロイト解釈学にも、古典主義時代の一般文法、博物学、富の分析に知の共通の布置を認める際のM. コーコーの考古学的記述にも、等しく認められるものである。私は、しかし、例えばG. ムーナンのように、彼らの言語学用語の不当な拡大適用を批判しているのではない。また、いわゆる自然をも含み込んだ意味における社会的事象一般を広義の言語と見なし、その特徴を記号学的に探究することにも異論はない。問題は、ただ、狭義の言語との関係づけの方向とその仕方にある、構造主義者たちの比喩的關係づけには、その比喩理論に由来する方向違いが、そしてその比喩理論には、比喩的關係づけに帰因する誤認が認められるように思われるのである。この循環を断ち切りたい。

3

E. フッサールは、その著『経験と判断』の第一篇「前述定的(受容的)経験」の最終章において、受動性における関係把握について論じている。関係把握とは、後に述定的レベルにおいて関係判断と呼ばれる、一つの対象とそれと独立の他の対象との間の関係を述定する判断(例えば「鉛筆はインクびんのそばにある」とか「その鉛筆は昔そこにあったペンよりも長い」)の、前述定的レベルへの先まわりの投影である。これに対して、述定的レベルにおいて規定判断と呼ばれることになる、一つの対象の非独立的契機(内属性)に関する判断(例えば「この本は黒い」)の、前述定的レベルへの先駆的投影は、「解明」と呼ばれる。前者は「外的地平」において、後者は「内的地平」において成立する。というよりもむしろ、各々の判断の型にみあった形で、地平の分類が、やはり先まわりの、なされて

いるとみた方がよい。(こうした解釈は、それ自体フッサール批判を含んでいるように見えそうですが。)

その章の冒頭(第33節)において、フッサールは、既に関係把握の分類に着手してはいた。⁽¹¹⁾だがそれが全面的に展開されるに至るには、時間形式の考察を通じて、想起や空想と知覚との分離が行なわれるのをまたねばならなかった。第43節において、フッサールは「結合関係(Verbindungsbeziehung)」と「比較関係(Vergleichungsbeziehung)」の区別を導入する。「結合関係」とは「現実的なものの関係、すなわち関係項の現実的結合に基く関係」であり、フッサールはそれを「ひとつの時間内での現実的結合の統一」というように時間形式の面から規定する。⁽¹²⁾これに対して「比較関係」とは「全ての同等・類似関係、したがって現実の関係ではない」ようなそれである。フッサールのこの区別が、既にみたヤーコブソンの近接と類似の分類、更にソシュールの統合関係と連合関係の分類にきわめて近いものであることは容易に見てとれよう。⁽¹³⁾フッサールが比較関係に関してしばしば「連想(Assoziation)」いう語を用い、ソシュールの「連合(association)」と用語上の対応をみせていることも、「結合関係」のうちに原因と結果、全体と部分といった、換喩の基礎となる(といわれる)関係を含めていることも、この類比の妥当性を証拠立てているように思われる。勿論、そこには私の意図が介在している。ソシュールの「連合関係」は、(フッサールもそうだが)当時の連想心理学の影響を受けた心理主義の残滓として、今日ではむしろ「範列関係」と呼びかえられているにもかかわらず、私が敢えて「連合関係」に固執してきたのは、始めから現象学との通路を求めていたからにほかならない。にもかかわらず、私は構造主義と現象学をつなぐこの通路を、好ましからざるものと感じているのである。

そこに彷徨した人々は数多い。ここでは、しかしその代表的なものとして、「構造、語、出来事」におけるP.リクールの議論を辿ってみよう。この論文は現象学的立場からの構造主義批判の形をとって始まる。リクール

によれば、構造主義は新たな言表の産出としての話す行為を排除し、文化と人間の産出としての歴史を排除するとともに、何かについて何かを述べる (dire) という言語の最初の意図をも排除するものである。ここで私が問題にしたいのは、専らこの第三の点である。リクールは続けて次のように書いている。「言語は二重の視向 (visée) をもつ。すなわち理念的思念 visée (何かを語る) と実在的指示 référence (何かについて語る) である。」⁽¹⁴⁾ この指摘を、彼は フレーゲとフッサールの両者に結びつけようとする。「フレーゲは、言語の視向が二重であることを完璧に示した。即ち、理念的 (物理的、心的世界に属さない) 意味の視向と、指示対象の指向である。フッサールも『論理学研究』の中で、これと同じことを述べている、とリクールはみなす。「理念的意味は、満たされることを求める一つの空隙、一つの不在である。満たされることによって、言語はそれ自身に達し、即ちそれ自身においては死滅する。」⁽¹⁵⁾

フッサール及びフレーゲを、上のように要約することの可否は、今は問うまい。だが、ここで何か同じことがいわれているとはどういうことなのだろうか。リクールはいう。「フレーゲと共に意味と指示^{ジン ベドイトウング}を区別しようとフッサールと共に意味と充実^{ベドイトウング エアファールング}を区別しようと、このようにしてはっきりと分離されるのは、一つの意味志向であって、それが記号の閉域を破り (une intention signifiante qui rompt la clôture du signe, qui~) 記号を別のものへと開き、要するに言語を、述べる (dire) こととして、何かについて何かを述べることとして、構成するのである。意味の理念性から物の実在性への変転が起る瞬間は、記号の超越の瞬間である。この瞬間は文 (phrase) と同時である。」⁽¹⁶⁾ この一節は完全に混乱している、と私は思う。

・節の表題は「ディスクールとしてのパロール」であった。われわれはこの二つの単語の意味を、例えばこれを「言説としての発話」と訳すことによって、語の意味としてのみ捉えようとしがちである。ここでより関与的なのは、しかし、構文の違いであろう。discours を動詞 dire に変形し

parole を parler に変形してみれば、それは明らかになる。ディスクールが dire que~という形で文 (phrase) を従えうるのに対して、parler にはその構成機能がない、すなわちパロールは述定機能 (prédication) を欠いているのである。ディスクールとパロールの相違は、この観点から解釈されてよいと思うのである。さて、そのことを認めた上でなお、言語を何かについて何かを述べることとして、すなわち述定機能をもったものとして構成するのは、はたして「意味志向」であろうか、という疑問が依然として去らない。意味志向という思想はフレーゲにはなかった。いうまでもなく、それはフッサールのものである。しかし、リクールの原文で、その「意味志向」を関係代名詞の先行詞として語られる従属節の思想は、フレーゲのものにはほかならないのである。要するに、リクールの主張は、フッサールの意味志向の理説とフレーゲの指示対象の超越性のそれとの折衷にすぎない。この折衷の根底にある予断は、意識の志向性と記号の指示作用との同一視、すなわち混同である。

「夏休みあけ最初の金曜日は休講にします」という発言は、9月10日金曜日から授業が始まると信じている教授にとっては、9月10日を休講にし17日から授業を始めるという意味をもちうる。しかし、授業開始が9月11日からであるという客観的事実の下にあっては、この発言は9月17日を休講にし24日から授業を始めるという意味をもつ。すなわち、「夏休みあけ最初の金曜日」という言表の指示対象と、その言表によって話者が思念する (viser, meinen) 志向対象とは異っているのである。⁽¹⁷⁾ この例によっても、話者の意味志向と記号の指示作用とが峻別されねばならないことは明らかだと思う。しかし私は、単にそれらを区別することで満足することはできない。記号の働きを主体の意味志向に従属させようとする、リクールの根本志向に反して、私は、この依存関係そのものを逆転させる途を、遙かに眺望したいと思う。

リクールは、しかし、同論文の第三節において、前節の議論をふまえて

つ、更に、構造と出来事の媒介者としての語の役割を強調しはじめる。「文以前には語は未だない。文以前には何があるか。諸記号、すなわち体系における諸差異、語彙における諸価値である。しかし、意味作用、意味実在体 (entité sémantique)⁽¹⁸⁾ は未だない。記号は、体系における差異である限り、何事も述べ (dire)⁽¹⁹⁾ ない。」dire を漠然と“語ること”ととらず、文の述定機能ととり、かつその内部に暗々裡に含まれる意味志向の契機を取り除くならば、これは一応正論であろう。一抹の不安は意味作用と意味実在体を同格に並べ、実在体なしの差異の体系が何も意味しないかのようになっている点にある。けれども、リクールによれば、文は出来事であって、一時的なものだが、語はその文を超えて生き残り、新しい使用価値を孕んで体系に還り、そのことによって体系に歴史性を付与するのである。語はそのような累積的存在者であるから、それが体系に対しては多義性として現象する、とされる。彼が^{メタフォール} 隠喩の問題をとらえるのはこの観点からである。多義性が場と文脈の制限作用によって限定されない場合を、リクールは「言葉がお祭りをする (le langage est en fête)」という、この言い方は、われわれにヴィトゲンシュタイン『哲学探究』の第 38 節を想わせる⁽²⁰⁾。しかし、ヴィトゲンシュタインの主張に反して、リクールの結論は、当然にも、この言葉のお祭りにこそ言語のもつ無限の可能性 (開放性 ouverture. aperture) を認めるものであった。

この結論の正しさを、私もまた少しも疑わない。語それ自体の歴史的累積性に由来する多義性に比喩の根拠を見出そうとする視点も、貴重な視点ではある。だが、語は決して「意味実在体」ではない。積極的辞項を欠く差異の戯れのうちに、何か固い実的 (reell), 実質的 (substantiel—ソシュールでは形相的 formel と対語) な核を見出そうとする、リクールの現象学的情念は、彼の意に反して、既に構造主義に内在していた理論的弱点を顕在化し、拡大する役割を果すにすぎない。語もまた体系の内部でのみ価値をもつ (valable—フッサール風にいえば妥当 Geltung) 示差的存在者に

すぎないのである。それは自立的実在体ではなく、体系内の諸差異の結節点である（そして点には大きさが無い）。それゆえ、リクールの主張するところに反して、語が累積的存在者であるがゆえに、それが体系に対しては多義性として現象する、のではない。逆に、体系のもつ重層的構造が、個々の語においては多義性として現象するのである。そうだとすれば、比喩形象のもつ意味も大きく変らざるをえまい。比喩形象もまた、体系に内在するものとして、その重層的諸構造間の層転移（*décalage*）として記述できるはずだからである。この立場は、リクールの超越主義に対して、内在主義と呼ばれてよい。また彼の現象学的志向に対しては、構造主義的とさえいわれよう。にもかかわらず、前節で批評された構造主義との対比において、それがいかなる位置を占めうるかは、未だ定かではない。

4

この点を明確化するために、是非とも考慮されるべきは、M. ブラックが隠喩の類似説に対して行なった批判である。⁽²¹⁾彼の類似説批判をみるためには、まず置換説（と彼が呼ぶもの）の批判をみておく必要がある。置換説とは「隠喩的表現は、それと同義の字義通りの表現のかわりに使われる、とする見解」⁽²²⁾であり、この見解に従えば、隠喩的表現は、字義通りの表現でもあらわしえたはずの意味を伝達することになる。著者は字義通りの表現のかわりに隠喩的表現を用い、そして読者はその隠喩的表現を手掛りとして、隠された字義通りの表現を探るのである。隠喩の理解は暗号読解にも似る。「リチャード一世は獅子だ」という表現は「リチャード一世は勇敢だ」という表現のいいかえとみなされる。勿論、隠喩的表現（ライオン）はその字義通りの等価物よりも具体的であるという点において、読者はリチャード王から場違いのライオンへと思考を転ずる快感を味わうことはできる。⁽²³⁾だが、それだけなら「哲学者に読者を楽しませること以上の為すべきより重要な仕事があるならば、哲学的議論において、隠喩は真面

目な位置をもちえないことになってしまう⁽²⁴⁾」であろう。哲学者には読者を楽しませること以上のなすべきより重要な仕事があるということ、私はブラックほど楽天的に信仰することはできない。にもかかわらず、彼のこの指摘は完全に正当であると思う。確かに、隠喩は隠れた事実を開示するからである、

置換説によれば、著者は彼の意図する意味 m ではなくその関数 $f(m)$ を提示し、読者はそれに逆関数 f^{-1} を適用することによって $f^{-1}(f(m))$ すなわち m を得る。関数の違いが比喩の違いをうむ。そして隠喩の場合の関数は類似性にほかならない。かくて隠喩の「置換説」はおのずとその「類似説」に移行する。「類似説」においては、「リチャード王は獅子だ」という表現は「リチャード王は(勇敢だという点で)獅子に似ている」という表現の短縮形とされる。この場合()内は明言化されていない暗黙の了解事項なのだが、フッサールが「ある点に関する類似性 (Ähnlichkeit-in-bezug-auf)」と呼んだもの、すなわち「Aは α によってBを想起させる」という型の連想関係は、まさにこの「Aは α という点においてBに似ている」という型式で表現された隠喩解釈の基礎となりうるはずのものなのであった⁽²⁵⁾。

しかし、ブラックは、類似が客観的に与えられていること、すなわちAは α に関してBと似ているか—という問いがあらかじめ定まった答をもつことを、認めない。類似はつねに程度問題であって、真に客観的な問いは「Aは、 α の諸段階のしかじかのレベルにおいて、CよりもBに似ているか」という形をとらざるをえない。だがそうなれば隠喩はもはや力を失う。このアポリアを逃れるためには、隠喩的表現をありうべき字義通りの表現の置換等価物とみなすのをやめるほかはない。われわれが隠喩を用いるのは、しばしば「その隠喩が構成される以前だったら、隠喩的表現と、対応する字義通りの表現との間に、どんな類似を発見するのも困難だったと思われるようなケースにおいて」である⁽²⁶⁾。このような場合、隠喩は、既に存在する類似を言表にもたらずのではなく、むしろ類似を造り出すというべきで

あるう。

ブラックが類似説に対置するのは「相互作用説」である。この説にしたがえば、「貧民はヨーロッパの黒人である。」という表現は、単にアメリカの黒人とヨーロッパの貧民のある類似性を語っているのではない。黒人に対するわれわれの諸々の思いと貧民に対するそれが、そこで相互に作用しあい、その結果ある新しい意味が醸出されるのである。「男は狼だ」といわれる場合、前提されているのは、狼に関する真なる知見の束ではなく、ある(言語)共同体の成員の間に共有されている狼にかんする標準的信憑、すなわち常識の束である。専門家的知識の観点からは、この信念体系はまちがっていることが多い。「あいつは狸だ」という文の意味を、動物園のタヌキ飼育係が一般人よりもよく理解できるということは、原理的にありえない。すなわち、この文を理解するためには、物としてのタヌキの観察を必要としないのである。さらに、動物学者のもつ解剖学的知見も、ここでは何の役にも立たない。すなわち、隠喩の成功にとって真理は問題にならないのである。したがって、私はこの常識体系に、エピステーメーを連想させる「客観的知識」という言葉との対比において、「客観的臆見」という一見形容矛盾の規定を与えたいと思う。客観的臆見は、しかし、文化的には相対的である。「狼を死者の再生とみなす民族は、『男は狼だ』という言表にわれわれが想定しているのとは全く異った解釈⁽²⁷⁾を与えるであろう。」

だが、この文化的共同体は、多くの場合、言語的共同体と重なりあっている、という経験的事実を見落してはならない。狼を死者の再生とみなす民族は「男は狼だ」という同一の言表にわれわれとは違った解釈を与えているのではない。われわれと彼らの間では、元々「狼」という語の含意が異っているのである。より正確には、彼らには、この場合の「狼」に当る語がないといってよい。そして、隠喩が力を発揮するのは、言語的共同体とほぼ重なりあった、文化的に相対的な、この種の客観的臆見に基いてであって、物の類似性に基いてではない。

「男は狼だ」といわれることによって、男のもつ諸特徴のうち、狼のものと一緒に信じられている(が実はそうでないかも知れない)諸特徴と合致するものだけが浮き彫りにされ、他の諸特徴は背景に消え去る。この機制は、ちょうど、何本かの透明な線の入った濃い曇りガラスを透して、星空をながめるのに似ている。隠喩は、このガラス板のようなものだ、とブラックはいう。⁽²⁸⁾ブラックのこの比喩は、隠喩という星空のある局面をくっきりと浮び上らせるよく出来た曇りガラス、すなわち成功した比喩であると、私も思う。だが、この曇りガラスによって消され、なお輝きを失わない隠喩の星座があるとすれば、それは、星空は元来、隠喩以前に、何らかの曇りガラスを通して見られていたはずだ、という比喩を補足することによって、すなわちそういう曇りガラスを重ねてみることによって、可視的となるように思われる。

ブラックは更に、隠喩を、戦争をチェスの用語で語ることに譬えている。⁽²⁹⁾チェスの言葉で語られることによって、戦争のもつある局面が強調され、別の局面は無視される。しかもただ選択が行なわれるだけではなく、他の言葉(たとえ日常言語であろうと)を用いたのでは見えなかったであろう戦争のある局面が、この用語を用いることによって始めて視えてくるのである。大森荘蔵氏は、話題の論文「ことだま論」の中で、理論の構図を細胞の染色法になぞらえている。使用される染色液の種類に応じて、同一の細胞のもつ異った諸局面が浮き出てくる。一つの染色法では見えなかった細胞構造が、別の染色液の使用によって明瞭になる。すぐに気づくように、この比喩はブラックの隠喩に対する比喩とよく似ている。このことはわれわれに、比喩の形成作業と哲学のそれとの間にある、ある種の類比関係を想像させる。(そして大森氏の哲学が造り出すのは「立ち現われ」の比喩であった。)

曇りガラスや染色液の比喩が適用される場合、注意すべきは、ブラックの想定に反して、いかなる染色液によっても染められていない細胞、いか

なる曇りガラスによっても汙過されていない星空，すなわちいかなる言葉によっても語られていない戦争は，われわれの世界にはない，ということ，つまりそういう染色法をとることである。われわれの世界は，日常言語と，それと重なりあった客観的臆見の体系によって，いつもすでに染められ，汙過され，そして語られているのである。（「ことだま論」の場合は，西洋近世哲学が造り出した物心二元論とそれに基く今日の常識的世界把握がそれに当る。）すべては，したがってまた隠喩も，その内部でのみ生起する。それは，既に染色された細胞をさらに別の染色法で染めることに，また，既にあの曇りガラスを通して見られている星空をさらに別の線の入った曇りガラスを通して視ることに譬えられよう。しかし，より正確には，むしろ元々重なりあった二枚の曇りガラスを，意図的かつ強引に，ずらしてみることに譬えられるべきである。二枚の曇りガラスとは，この場合，日常言語の網目と客観的臆見の体系にほかならない。そして私は，この種のずらしを層転移 (décalage) と呼びたいのである。

「立ち現われ」ということによって，大森氏もまた，染色ではなくこの層転移を行なっているといえよう。その言葉に付着する常識的含意性を，制度化された選択制限規則を破って，より広い範囲に適用することによって，世界のある局面が全く新たな相貌の下に浮び上る。それはちょうど，日程を「消化する」ということによって，旅が食物との類似の様相の下に立ち現われ，コンピューターの「言葉」ということによって，コンピューターのもつある局面（人間に似た面）が浮き上り，そのことによって人言葉の働き方とコンピューター言葉の働き方の「大違い」が些かなりとも減少するのと同様である。⁽⁸¹⁾

I. A. リチャーズが考案し，⁽⁸²⁾ M. ブラックがその名の下に実は無視した「相互作用説」の真の意味も，かくて始めて明らかになる。コンピューターが「記憶」し，「思考」し，「言葉」を話すというとき，われわれはコンピューターに人間の曇りガラスをあてて視ているのではない。（もしそう

だとしたら、少しも相互作用していない。)実際、そこでは、コンピュータが人間的な相の下に立ち現われると同時に、人間の記憶や思考の仕方、言葉の使い方のほうも、何かコンピュータ的な様相を呈するはずである。(だからこそ、そうした用語法を批判する人々の大半は、感情的にはむしろ後者の事態を忌み嫌っている人々である、ということも起りうるのだ。)そして、その相互作用は、「コンピュータ」に関する今日の客観的臆見の束と、語り思考し記憶する「人間」に関する客観的臆見の束との間の^{デカラージュ}層転移に基いているのである。(日程を「消化する」と言うとき、逆に、食物の方も些かなりと旅化されているはずなのである。)

5

「立ち現われ」、あるいはまた例えば「風景」も、すぐれた哲学的隠喩ではあろう。しかし、私がこの節において特別の理由を込めて主題化したいのは、J. デリダによる「エクリチュール」の隠喩である、その際、手掛りとされるのは、『グラマトロジー』⁽⁸³⁾の26ページから27ページにかけての、人目につきにくいごく短い段落である。

冒頭でデリダは次のようにいう。「…したがって、この時代の内部では、^{レクチュール}読みと^{エクリチュール}書きは、…二次性の中に閉じ込められている。それらに優先するのは、^{エレマン}ロゴスの領域を通して、またその中で、既に構成されていた何らかの真理あるいは意味である。」「この時代」といわれているのは、「記号の時代」である。デリダによれば、記号と神的なものとは同時に同じ場所で生まれ、「記号の時代は本質的に神学的である。」そして、その閉域は素描されているにもかかわらず「その時代は恐らくは決して終らないであろう。」なされるべきことはただ、「その閉域の内部において、遠回りですぐに危険な、そしておのれが解体するものの手前に再び落ち込むおそれのある運動によって、^{クリティーク}決定的に重要な諸概念を、慎重かつ綿密な述定で取り囲み、それら諸概念の有効性の条件、場、限界を提示し、それら諸概念

はおのれがその解体を可能にしている機構に属していることを、厳密に指し示す⁽³⁴⁾ことだけである。その「諸概念」の中心は「記号」であり、「記号」という主題は、約一世紀以前から意味、真理、現前、存在を記号作用の運動から守ると主張してきた一つの伝統の断末魔のあがきとなっている。⁽³⁵⁾記号概念を疑うとは、それゆえ、「記号に先行し、その外部にあり、それより上位にある現前的真理の審級から」⁽³⁶⁾ではないのである。このことを追補的に確認しておいて、次に進もう。

「事物、すなわち『指示対象』が、始めはそこにおいて事物が語られ思惟された意味であった、あの創造神のロゴスと、直接的に関連はしなくとも、記号内容^{シニファイエ}はやはりロゴス一般と直接的関係^{シニファイアン}をもち、記号表記、すなわちエクリチュールの外面性とは間接的関係をもつ。そうでなくみえるとすれば、隠喩の媒介がその関係のうちに滲み込み、しかも非媒介を装ったからである。」隠喩的エクリチュールの例として、デリダはここで、プラトンの『パイドロス』において字義通りのエクリチュールと対比された「魂の中の真のエクリチュール」を挙げている。より興味を引く例は、しかし、M. フーコーがルネサンス時代のエピステーメーに帰属させる「書かれたものの絶対的特権性」に見られる。フーコーは例えば次のように書いている。「声の音は、言語の一時的で仮の翻訳でしかない。神が世界の内に置いたのは書かれた言葉であり、アダムが最初の名を獣たちにつけたとき、彼はこの可視的にして沈黙の烙印を読んだだけである。律法は人々の記憶ではなく石板に刻まれた。そして真なる言葉が見出されるのは書物の中であるべきだ。⁽³⁷⁾」まぎれもない隠喩的エクリチュール（及び隠喩的レクチュール）がここにみられる。そこに、ルネサンス時代の「書かれたものの絶対的特権性」が実は隠喩的なものであることを見てとるか、それとも、本来のエクリチュールと隠喩的エクリチュールとのデリダ的区別がフーコーにはないことを見てとるかは、自由である。⁽³⁸⁾けれども、フーコーの著作の性格から判断する限り、この二つの見方を厳密に別つことはできないである

う。

「こうした叙述において隠喩として働くものはすべて、ロゴスの特権を追証し、そしてエクリチュールにその時与えられる『本来の』意味を基礎づける。『本来の』意味とは、現前的ロゴスの近みにおいて永遠的に思惟され語られる永遠的真理を、それ自体で記号する記号表示をさらに記号する記号 (signe signifiant un signifiant signifiant lui-même une vérité éternelle……) である。」この「本来の」意味の内部においては、「…真理を、それ自体で記号する記号表示」とは、勿論パロール、魂の氣息のこもった言葉(言霊)であり、エクリチュールはそのパロールを、更にまた記号する記号とみなされているのである。だが、「勿論、この隠喩は未だ解明されておらず、最初の隠喩としてのエクリチュールの『本来の』意味へと送り返される。この『本来の』意味は、あの叙述の担い手たちによって未だ考えられていない。問題は、したがって、本来の意味と比喩的意味を逆転させることではなく、エクリチュールの『本来の』意味がそれ自体隠喩的なものであることをはっきりさせることであろう。」デリダは、隠喩的エクリチュールではなく、かくて隠喩的に解釈されたエクリチュールの「本来の」意味(評価を逆転すれば、これが原^{アルシ}エクリチュールとなる)を、おのれの哲学の拠点としているかにみえるにもかかわらず、あるいはまたそれゆえに、彼自身その隠喩機能を十分解明してはいない。そこに字義通りの解釈とならんで様々な秘義秘教的諸解釈の生ずる余地が残されているように思われる。その解明を行うことによって、それら諸解釈を退けたい。

デリダが、エクリチュールの隠喩によって、いかなる類似性を造り出そうとしているのかを見るためには、エクリチュールに関する真なる知識、したがってまたその観察は、何の役にも立たない。むしろ、エクリチュールにまつわる胡散臭気な臆見体系を想起し、彼がそのどの局面を強調しているかを見てとる必要がある。もしその部分が探り当てられるならば、彼の叙述の主題となっているものが、共通の局面の側から逆探知され、その隠

れた主題とエクリチュールとの相互作用によって、エクリチュールの隠喩の真価が明るみに出るであろう。そして、手掛りは既にあたえられているのである。それは、デリダ自身によって定式化されたあのエクリチュールの「本来の」意味である。「現前的ロゴスの近みにおいて永遠的に思惟され語られる永遠的真理を、それ自身で記号する記号表示をさらに記号する記号。」この些か修辞加剰な定式化のいわんとするところは、真理を直接示す^{しるし}記号（すなわちパロールあるいは「声」）を、二次的に示す^{しるし}記号ということであろう。

エクリチュールをこのようにとらえたものは数多い。（このようにとらえなかった者がいただろうか。）プラトンと同様、アリストテレスも「命題論」の中で次のように書いている。「音声^{フォーネー}の中の状態は、^{プシユアー}靈魂の中のそれの象徴^{シムボラ}であり、そして、書かれたもの^{エクリチュール}（*γραφόμενα*）は、音声の中の状態の象徴である。そして文字表記^{エクリチュール}（*γράμματα*）が全て（の者）に同一ではないように、音声もまた同一ではない。しかるに、それら両者がまず何よりもその記号であるところの魂の状態は、全て（の者）に同一であり、そしてこの状態がその似像である事物も既に同一である⁽³⁹⁾。」（1, 16a3）前半に関しては、ほとんど問題はないと思う。デリダ自身、このアリストテレスの規定から、おのれのエクリチュール概念を構想したのではないかと思われるほど、彼のいう「本来の」つまり通俗的エクリチュール概念にぴったりと符合する。だがまた、後半の部分で、音声と文字がともども、それ自体が事物の似像であるところの魂の状態の記号である、とされるとき、この規定自体が、隠喩的に解された「本来の」エクリチュール概念に符合していることに、注意すべきである。何故ならば、そこでは音声と文字、つまり言語は、事物の類似記号である魂の、二次的記号とされているからである。すなわち、^{シムボラ}象徴関係の下での「本来の」エクリチュールは、^{セーメイア}記号関係の下で、隠喩的に解された「本来の」エクリチュールに移行するのである⁽⁴⁰⁾。そして、この後半のエクリチュール論に関する限り、近世の哲学者たち、

例えば「理性」論者デカルトの言語論も「経験」論者ロックのそれも、このアリストテレス説を出るものではなかった。⁽⁴¹⁾ 例えばロックは、人間は神から与えられた分節音を内的観念の記号とし、それによって他人との意思疎通も可能となると主張する。⁽⁴²⁾ しかし、その時既に、ロックの場合、「観念」は沈黙の感覚と無言の反省によって、あらかじめ出来上っているのである。⁽⁴³⁾ デリダのエクリチュール主義は、隠喩的に解された「本来の」エクリチュール、すなわち原^{アルシ}エクリチュールに、同じように隠喩的に解されたパロールあるいは「声」、すなわち魂^{プシキケー}の状態や内的観念^{アイデア}の近みに対する、ある先在性^{プリオソテ}を与えるものにほかならない。

アリストテレスとほぼ同様の思想を、言語学の立場から主張したのも、ソシュールであった。「エクリチュールの幻惑力」と題された『一般言語学講義』の第6章第2節の冒頭には、「言語^{ラング}と文字表記^{エクリチュール}とは、二つのはっきり異った記号体系であり、後者の唯一の存在理由は、前者を表記することにある。⁽⁴⁴⁾」と記されている。この主張は、引用されたアリストテレス『命題論』の前半のそれと、ほとんど同じ思想を表明しているとみてよからう。ソシュールは更に、この節の題目に示された「幻惑力」の主張に赴き、その章の最終節において、「文字表記は言語を見る眼をおおう。すなわち文字表記は衣服ではなく仮装である。⁽⁴⁵⁾」というあの名高い言葉を残すに至るのである。それにもかかわらず、私は、ソシュールが隠喩的に解された場合のエクリチュールの二次性を主張していたとは思はない。『グラマトロジー』第一部の後半で展開されるデリダのソシュール批判は、おのれの創出した比喩形象に文字通り幻惑された、彼のもつ最もばかばかしい面があらわれている箇所である。その中でも、しかし、デリダは「記号の恣意性の主張は、それゆえ、ソシュールがエクリチュールを言語の外の闇に追いやるときに明言している主題に、間接的にではあるが癒しがたいほどに(sans appel) 異議を唱えている。⁽⁴⁶⁾」と述べて、ソシュールが決して原^{アルシ}エクリチュール、すなわちそれ自体隠喩である『本来の』エクリチュールを言

語の外の闇に追いやってはいないことをほのめかしている。

ソシュールは次のようにいう。「われわれは、24時間おきに出発する『午後8時45分発ジュネーブ発パリ行』の二本の急行列車を同一であるという。…ところがおそらくは機関車も客車も乗務員もみんな違っているであろう。…その急行列車を成り立たせているものは、その発車時刻、経路、一般的にいえばそれをほかの急行から区別する全ての状況である。同一の諸状況が実現される度に、同一の存在者ができる。にもかかわらず、それは物質的実現の外では考えられないのだから、抽象的なものではない。⁽⁴⁷⁾」車体や乗務員にあたるのは、音声の個人的な実質(substance または matière)や意味の私的な実質であり、急行列車を成り立たせているものは「体系に由来する妥当性 (valeur)」であって、それは「全く差異的なもの」である。ソシュールにとって価値あるものであるのは、後者のみである。それはちょうど、各人の色彩知覚の実質を問うのは無意味だがその差異の型は客観的に有意味に問えるのと同様である。(色盲検査とは、各人の差異体系間の位相同型(同相)の検査であろう。)

差異を全く静態的にとらえているという欠陥はあるにもせよ、こうした視点は、エクリチュール主義(隠喩的に解された「本来の」エクリチュールの第一次性の主張)と少しも矛盾しない。ヴィトゲンシュタインの「甲虫」の比喩も、この「急行列車」の比喩と同質のものである。「各人が箱を一つもっていて、その中にわれわれが『甲虫』と呼ぶ何かが入っている、としよう。たれもそれぞれ他人の箱をのぞきこむことができず、各人とも自分の甲虫を見ることによってのみ、甲虫の何たるかがわかるのだ、という。—このとき、各人がそれぞれ自分の箱の中にちがったものをもっていることが、当然ありえよう。それは絶えず変化していると想像することすらできよう。—だが、今、この人たちの『甲虫』という語に一つの慣用があったとしたら?—そのとき、その慣用は一つのものを表記する慣用ではないであろう。⁽⁴⁹⁾」この甲虫は、もちろん車体でも乗務員でもありうる。デ

リダ風にいえば、それは私的実質における「現前的意味」である。そして、かの急行列車を成り立たせているものは、ヴィトゲンシュタインの場合、言語ゲーム (Sprach Spiel) であった。(箱の中のものはゲームの一部ではない。)⁽⁵⁰⁾

この比較は、両者がともに偏愛したチェスの比喻を想起すれば、より確実なものとなる。ソシュールは、急行列車の比喻の直後、次のように語る。「今ゲームの最中に、その駒をこわしたかなくしたかしたと仮定しよう。他の等価の駒をそれに替えてもよいだらうか？—よろしい。もう一つの同じ駒でよいのみか、同じ効力 (valeur) をもたせさえすれば、それとは全然似ていないものでも、同一のものといわれよう。」⁽⁵¹⁾ この一節は、ヴィトゲンシュタインが「痛み」を駒に譬えて語ったものだったとしても少しも不思議はなかったであろう。⁽⁵²⁾ ヴィトゲンシュタインには、しかし、デリダやソシュールが強調する「差異」の思想がない。その場所で彼が強調したのは振舞あるいは行動であった。彼の行為論を差異化の運動に結びつけることは、牽強附会の謗りを免れまい。しかし、もしそれが許されるならば、エクリチュールの比喻は、更に明晰な透視力をもった層転移となるはずなのである。

M. フーコーは『言葉と物』の中で、コンディアックとデステュットの言語起源論を敷衍しつつ次のように述べていた。「身体の単なる延長である限り、動作は語るためのいかなる力ももたない。それは言語ではない。それが言語となるのは、特定の複雑な操作を経ることによってだ。すなわち、関係間の類比への注目 (他人の叫びと彼の感ずるもの—未知のもの—との関係は、私の叫びと私の空腹や恐怖との関係に等しい)。時間の逆転、そして記号の示す表象に先立つ記号の意図的使用 (叫ばざるをえないほど強い空腹を感ずる以前に、私はその感覚と結合している叫びをあげる。) …言語はこの錯綜の土台の上のみ可能となる。言語は理解や表象の自然の運動にではなく、記号と表象の可逆的で分析可能な関係に基づいている。

言語が生れるのは、表象がおのれを外化する (s'exterioriser) ときではなく、表象が慎重におのれからある記号を引き離し、その記号によっておのれの代理をつとめさせる (se faire représenter) ときである。⁽⁵³⁾ 一見、ここには、言語への移行が見事に描写されているかに見える、しかし、それは言語によってもたらされるものを、あらかじめ言語以前の動作の内に滑り込ませておく、というトリックによって可能となったにすぎない。叫ばざるをえないほど強い空腹や恐怖を感ずる以前に叫ぶことができるのであれば、その叫び、すなわち意図的に使用された記号は、既に言語体系（差異的な）の内に位置を占めているはずなのである。空腹—叫びの盲目的有契連鎖の直中に、突如として無契的恣意的記号が可能となるとは思えない。その契機となるのが、叫びを指標としてなされる他人による言語の教授である。faim なり hungrig なり、私の空腹感の私的実質とは本来何のかかわりもなかった分節音を習得し、叫ぶかわりに話すことができるようになって始めて、私は「叫ばざるをえないほど強い空腹を感ずる以前に」たとえば "Ich bin schrecklich hungrig" と言えるようになるのであり、そしてその結果、今度は話すかわりに叫ぶことができるようになるのである。⁽⁵⁴⁾ こうして、泣かざるをえないほど強い痛みを感ずる以前に泣く（泣いてみせる）、すなわち記号を意図的に^{わざと}使用する子供、つまり人間の子供が生まれる。

私は、長い間この観点を「演技」と呼んできた。⁽⁵⁵⁾ 「演技」とエクリチュールの比喩をつなぐのは演戯、ヴィトゲンシュタインとニーチェ（そしてフランク）がそれぞれ独自の角度から描写したあの Spiel である。「言語と表象の可逆的で分析可能な関係」は、演戯によってはじめて可能となる。デリダならばこれを「代理が表象に先行する」というかも知れない。だが、そのことによって「空腹感」そのものが消滅するわけではあるまい。そうであってみれば、私が叫び出す以前に『空腹』をうったえるとき、私は空腹の体験を差異化しているとはいえないはずはあるまい。連続的な母

音系列^{セリ-}が日本語では5つにフランス語では16に離散化されるように、空腹は、その時は元気が出ずその後はふつうよりも大量のものを食べるといった構文形式のうちで、また疲労や渴きとの非連続性によって、生活の文法体系において、差異を弁別する一つの離散的単位となるのではあるまいか。もしそうだとすれば、この差異化の運動は、生きた現前性において与えられた意味を延期させる (différer)、エクリチュールの運動の一つであるといえよう。

6

エクリチュールの隠喩的理解の下で、われわれは更に隠喩のエクリチュールの理解⁽⁵⁶⁾について語ることができる。しかし、私には最早その余裕はなく、また必要もない。何故なら、この論文の前半における構造主義的、現象学的隠喩論にに対する批判は、まさしく隠喩のエクリチュールの理解の先駆的追究だったからである。そこで獲得された層転移的隠喩理解から出発して、私はエクリチュールの隠喩を解明してきた。しかし逆に、ここで解明されたエクリチュール理解を前提すればこそ、構造主義的現象学的隠喩論(「声」の隠喩論)の批判が可能になったのである。かくして叙述は循環する。これは、本来破綻によって、本質的に比喩を絶する最終根拠(最後の駒)が、そこからあの無気味な顔をのぞかせる一步手前で、問題を回避して逃走することかもしれない。しかし、この挙措によって、私は、エクリチュールの全面支配が絶えずどこかに亀裂を残し、完全な根拠の抹消がそれゆえ不可能であるということを、デリダをはなれて、搦め手から確認してみたかったのである。

しかしまた、この痕跡化された地平に、なお根拠の惰眠を貪り、絶対的な近みの言葉を夢見ることがゆるされているとは、何とむなしい慰めであるろうか。

注

- (1) Cf. J. J. C. Smart, *Sensations and brain processes*, in C. V. Borst (ed.), *The Mind/Brain Identity Theory* (Macmillan, 1970), P. 57.
但し、譬えは若干変更されている。
- (2) この語には様々な日本語訳が試みられている。書、書記、記述、書字、文字表記、文字言語、文書態といったところが主なものだろうか。私は、^{レクチュール}読み、^{ディスクール}述^{パロール}べ、話しといった訳語とともに用いるという条件で、また、馴染深い果物との無用な音韻的連想を度外視するならば、「書き」という訳がふさわしいように思う。
- (3) 隠喩とは、人生を旅に、泳げない人を金槌に、おとなしい人を羊に、少年を若鮎に譬える比喩形象で、普通その比喩機能は類似性に基くとされる。これに対し、換喩とは、杯をかわす、サルトルを読む、口が悪い等、酒を杯で、著書を著者で、言葉を口で表わす比喩形象で、その比喩機能は、普通近接性に基くとされる。
- (4) Ferdinand de Saussure, *Cours de Linguistique Generale* (Payot, 1972), P. 171
- (5) ソシユールは、*enseignement* の連合系列に、*apprentissage*, *éducation* といった記号内容に基く連合を、*enseigner* のような品詞の変化に基くものや、*changement* のごとき形態上の類似に基くものと並置して扱っているが、記号内容の統合関係は全く問題にされていない。
- (6) André Martinét, *Elément de Linguistique Générale* (Armand Colin, 1970), P. 27 (三宅徳嘉訳『一般言語学要理』岩波書店, P. 34)
- (7) ロマーン・ヤーコブソン「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」川本茂雄監修『一般言語学』(みすず書房) II 節。以下、ヤーコブソンに関する言及はこの論文による。
- (8) 提喩とは、部分で全体を表現する比喩形象で、換喩の一種とされる。
- (9) なおロラン・バルト『零度のエクリチュール』渡辺・沢村訳 (みすず書房, 1971年) P. 159 以下参照。
- (10) 紙幅の制限により、この箇所におかれたレヴィ・ストロース批判を削除せざるをえない。レヴィ・ストロースは隠喩・換喩という言葉や、言語表現における文字通りの意味の他に、物の類似性や近接性に関しても適用し、その間の区別を抹消することによって体系形成を強行している、というのがその要点である。例えば『野性の思考』(みすず書房) P. 250 を参照。

- (11) Edmund Husserl, *Erfahrung und Urteil* (Felix Meiner, 1972) S. 174
(長谷川宏訳『経験と判断』河出書房, P. 137)
- (12) Ebd. SS. 216-7 (日本語訳 P. 170)
- (13) 田島節夫『言語と世界』(勁草書房, 1973年) 279頁にこのことの指摘がある。
- (14) Paul Ricoeur, 'La structure, le mot, l'événement', in *Le conflit des interprétations* (Edition du Seuil, 1969) P. 85
- (15) Ibid., P. 87
- (16) Ibid., P. 88
- (17) cf. Keith S. Donnellan, 'Proper name and Identifying description' in D. Davidson, G. Harman (eds.), *Semantics of Natural Language* (Reidel, 1972) PP, 368-70. なお、私が挙げた例文は、J. L. Austin のいう遂行文にあたり、文としての真偽は問えない。その限り、フレーゲの理説とはうまくかみあわない例ではあるが、実際に起ったことに基いているので使ってみた。
- (18) 意味論的存在者の謂いではない。
- (19) Ricoeur, op. cit., P. 92
- (20) 尤も、feiern を「お祭りをすると」訳すのは語訳になろうが。
- (21) その視点は、同時にまた換喩の近接説に対する批判ともなりうるものだが、以下は専ら隠喩に焦点を定める。
- (22) Max Black, 'Metapor' in *Models and Metaphors* (Cornel University Press, 1968) P. 31
- (23) これは言語学者のいう選択制限規則侵犯, 分析哲学者のいうカテゴリーミス
テイクのもつ積極的意義である。
- (24) Black, op. cit. P. 34
- (25) Vgl, Husserl, a. a. O., SS. 227-8 (日本語訳 P. 179-80)
- (26) Black, op. cit. P. 37
- (27) Ibid., P. P. 40 (なお「男は狼だ」は “man is a wolf” の意図的誤訳である。)
- (28) Ibid., P. 41
- (29) Ibid., P. 41-2
- (30) 大森荘蔵編『講座哲学(2巻)世界と知識』(東大出版会, 1973年) P. 177
- (31) 「もともとは『人間の言葉』, 人と人との間の言葉, の意味を拓げて, コンピューターとのやりとりをも, 『言葉』と呼ぶことは自由であるが, そう呼ぶことによって, 『人言葉』の働き方と, 『コンピューター言葉』の働き方の大

- 違いは些かも減りはしない。それは、日程を『消化する』と言うことによつて、食物の消化が旅と些かでも似てきはしないのと同様である。」（同書 P. 171）もしそうであるならば“知覚と想像，想起をともに「立ち現われ」と呼ぶことは自由であるが，そう呼ぶことによつて，それらの間の大違いは些かも減りはしない。”ともいえよう。（事実，多くの人が今もそういう..）
- (32) I. A. Richards, *The Philosophy of Rhetoric* (Oxford, 1936) Chapter 5
- (33) Jacques Derrida, *De La Grammatologie* (Les Editions de Minuit, 1967) (足立和浩訳『根源の彼方に』現代思潮社，PP. 37-8) 但し，以下訳文はこの訳書には従わない。
- (34) Ibid., P. 25 (日本語訳 P. 36)
- (35) Ibid., P. 26 (日本語訳 P. 36)
- (36) Ibid., P. 26 (日本語訳 P. 37)
- (37) Michel Foucault, *Les mots et Les choses* (Gallimard, 1966) P. 53 (渡辺，佐々木訳『言葉と物』新潮社，P. 64)
- (38) 後者の読み方をとれば，デカルトのテキストの読みをめぐる，フーコー・デリダ間でなされた「狂気」論争の意義も明らかになる。
- (39) Derrida, op. cit. P. 21 及び Martin Heidegger, *Unterwegs Zur Sprache* (Neske, 1971) S. 244 (原文). S. 245 (ハイデガー式独訳) この独訳とギリシア語原文との対照に関して，岡本由紀子君の教示を得た。記して謝意を表す。（なお，この引用文を含むハイデガーの論文 *Der Weg zur Sprache* も，本稿の主旨とかがわりが深いが，ここではふれている余裕がない。）
- (40) このようなエクリチュール観をもったアリストテレスが，^{アナゴギン} 隠喩の類似説の最初の主張者であったことを指摘しておくのも，無駄ではあるまい。（cf. 『詩学』1457b）
- (41) デカルトについては，修士論文『受肉と演技』の第一章で論じた。
- (42) 『人間知性論』第3巻第1～2章参照。
- (43) 同書，第2巻参照。
- (44) Saussure, op. cit. P. 45
- (45) Ibid., P. 51
- (46) Derrida, op. cit. P. 66 (日本語訳 P. 94)
- (47) Saussure, op. cit. PP. 151-2
- (48) Ibid., P. 162
- (49) 『哲学探究』293節
- (50) プラトンは『パイドロス』でいう。「人々がこの^{エクリチュール}文字というものを学ぶと，

記憶力の訓練がなおざりにされるため、人々の魂の内に忘れっぽい性質が植えつけられる。それはほかでもない、彼らは書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに刻み込まれたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出さないようになる。事実、あなたがたが発明したのは、記憶の秘訣ではなく想起の秘訣なのだ。また、あなたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真の知恵ではない。(275A) 藤沢令夫訳 (岩波文庫) PP. 134-5. プラトンの放ったこの隠喩的な意味でのエクリチュール批判に、真っ向から反論し、内なる「声」と外なるエクリチュールの地位を逆転させた最初の人もヴィトゲンシュタインであった。一般に私的言語の批判として読まれる「感覚日記」の断章 (前掲書 258 節以下) は、当然エクリチュール論として読まれてよいものである。

- (51) Saussure, op. cit. PP. 153-4
- (52) しかし私は、ヴィトゲンシュタインに反して、そしてソシュールとともに、チェスの駒が存在しなくともよいとは思はない。もしあらゆる比喻を絶する最終的な駒があるとすれば、それは私である。それはいわばヴィトゲンシュタインの用いる「私^{ブリグアット}的」という語の「私」を実体化することであり、明白にデリダの思想に反する。デリダのエクリチュール主義の根本は、そうした一見最終的とみえる駒も、一つの比喻形象にすぎないとするところにあるからである。あらゆる本来の意味に比喻的な意味が先行するという隠喩は、しかし、それを通して見られる星空すら抹消しうるのだろうか。
- (53) Foucault, op. cit. P. 121 (日本語訳 PP. 131-2)
- (54) ヴィトゲンシュタイン、前掲書244節。及び黒田亘『経験と言語』(東大出版会) P. 245参照。
- (55) 卒業論文『言語行為の重層的演技性』、修士論文『受肉と演技』等。
- (56) われわれは、差異化され延期され痕跡化された「痛み」の感覚 (死んだ現前性) の下でのみ、心の「痛み」を語り、神の「痛み」の神学を説くことができる。